

ダイズモザイク病に強く大粒良質で 高蛋白な大豆新品種「里のほほえみ」

国内で消費される食品用大豆の約半分は豆腐や油揚げ類に仕向けられるため、これらの用途に向く国産大豆の安定供給が実需者から強く求められています。現在、南東北地方では豆腐用大豆として「エンレイ」や「スズユタカ」などが作付けされています。しかし、高蛋白品種の「エンレイ」は、この地域で主に発生するダイズモザイクウイルスのCおよびD系統に弱く、収量や品質の低下を招く恐れがあります（AおよびB系統は東北地方全域に発生します）。また、ダイズモザイクウイルスのA～D系統に強い中粒品種の「スズユタカ」は、子実の蛋白質含量が低めで湿害や連作などによる小粒化が問題となっています。

そこで、東北農業研究センターでは、ダイズモザイクウイルスのA～D系統に強い「東北129号」と極大粒系統の「刈交0264MYF₆」を交配し、南東北地方向けのダイズモザイク病に強く大粒良質で高蛋白な大豆品種「里のほほえみ」を育成しました。



写真1 / 「里のほほえみ」の子実

《「里のほほえみ」の特徴》

「里のほほえみ」は、ダイズモザイクウイルスのA～D系統および紫斑病に強く、これらの被害粒の発生が少ないため外観品質が良好です。また、白花で他品種と識別しやすく、百粒重が40g程度とかなり大粒です（写真1）。さらに、子実の蛋白質含量が「エンレイ」並に高く（図）、豆乳の抽出率、豆腐の硬さおよび食味にも問題がないことから豆



写真2 / 「里のほほえみ」の草姿と最下着莢節位

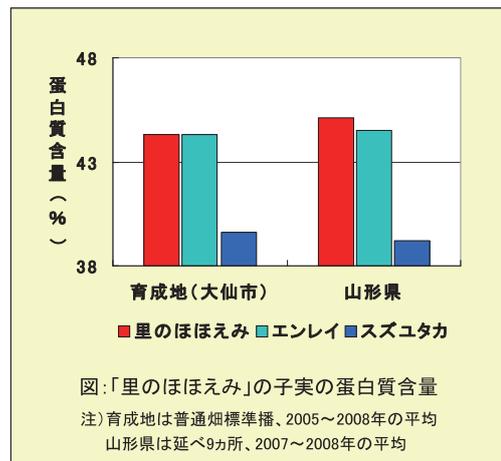
大豆育種研究東北サブチーム

菊池 彰夫

KIKUCHI, Akio



腐加工に適しています。加えて、「里のほほえみ」は、生育中に倒れにくく、最下着莢節位が高く（写真2）、莢が割れにくいことからコンバイン収穫などの機械化適性が優れています。



《「里のほほえみ」の栽培上の留意点》

「里のほほえみ」は、成熟期が「エンレイ」より1週間ほど遅い晩生種で栽培適地は南東北地方などです。ダイズシストセンチュウには「エンレイ」と同様に弱いので、度重なる連作やセンチュウ被害が発生したことがある畑での栽培は避ける必要があります。

《「里のほほえみ」の今後への期待》

「里のほほえみ」は、山形県で奨励（認定）品種に採用され、同県の主力品種の「エンレイ」の一部および「スズユタカ」に置換えて普及する予定です。今後、南東北地方などの高蛋白大豆の高位安定生産に貢献するものとして期待されています。

なお、「里のほほえみ」は、東北の「里」で健やかに生育して、生産者や実需者の顔に「笑み」がこぼれることを願って名付けられました。